

幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟

会報 No.47

平成26年3月31日

心より心に伝はる花

会長 藤本 圭佑

◆霊峰富士が三保の松原を含め世界無形文化遺産に登録された。ユネスコに出された富士山の推薦書には「羽衣伝説をもとに謡曲「羽衣」ができ能が海外に知られるきっかけになった」と紹介された。

続いて「和食」が登録されるや日本ブームにのって、外国人観光客が一千万人を超えた。次は二千万人へとグローバル化が進み、日本は伝統文化と観光の平和な生活大國をめざすことになる。

横浜には、開港以来世界に向けた文化の窓口として築いてきた「みなとまち文化」がある。紅葉坂文化ゾーンの能楽堂もその一つおとなし々のメイン舞台となるだろう。

◆昨年、日本人の平均寿命が83歳と世界一になった。能が大成された室町時代の平均寿命は15歳前後、世阿弥は「そもそも芸能とは、諸人の心を和らげて上下の感をなさむこと、寿福増長の基、遐齡延年の法なるべし。」(風姿花伝)つ

まり芸能は、幸福と平和を増進させるもとで、寿命を延ばすとし、ある書物によれば自身も健康に気を配り塩分油分を控え81歳の長寿を全うした。

人間五十年で知られる織田信長時代の平均寿命は30歳、実際に50歳を超えたのは戦後間もない1947年のこと。そして今、人生八十年時代となった。

私が仕えた長洲一二元神奈川県知事は著書「燈燈無盡」の中で「新しい時代にふさわしい価値観と生き方を一人ひとりが工夫して自分なりのライフスタイルを確立していく」と示唆している。これを拠る所に、来たるべき「人生九十年時代」に向け、謡を楽しみ健康で文化的に豊かに生きること、六百年の時に磨かれた能楽は、長寿社会となつてますます光彩を放つだろう。

◆連盟では、能楽を今後さらに普及発展させるため、一人でも多く

の方に能楽に接する機会をつくるため、若い世代との交流に取り組んでいる。

昨春秋、この能楽堂で関東観世流学生能楽連盟の「自演会」に案内をいただいた。

若いエネルギーが横溢するなかに美しくも柔和なる花を見る感動を味わった。

さらに、今年2月15日の「五流交流のつどい」でも関東の学生サークルから金春流大学生能楽研究会の国学院・早稲田合同で仕舞を、また高校以下の次世代の連吟出演を企画し、若い人たちの躍動を期待したが、まさかの二週連続の記録の大雪に見舞われ、参加者の安全を第一に考え、急遽当日の会を中止とし捲土重来を期することとした。

若手と言えば、私事で恐縮だが、2008年幽玄第36号に紹介させていただいた孫たちも少しづつ格好がついてきた。

日本人には能楽が良く似合うと感じるこの頃である。

◆平成26年度の連盟行事は、まず4月22日総会(中心議題は役員改選)次に、第62回「横浜能」6月14日(土)は喜多流粟谷能夫師の能「頼政」、和泉流野村万作師の狂言「寝音曲」、そして9月27日(土)「五流能楽大会」(第30回の節目の年)など盛り沢山である。

今年取組むべき課題は、一般市民の皆さんにも気軽に出席いただけるようチラシなど様々な情報発

信をするほか、会場には能楽を分り易くお楽しみいただける工夫もできるだけきめ細かく行なうことである。

能楽は、プロの芸を鑑賞するだけでなく、誰もが稽古事として手軽に楽しめる身近な文化として生活に深く浸透している。

美しく世界に誇れる文化であり心に沁みるクールジャパンとして、今後も、子や孫に伝えていきたい。

連盟報告(25年度前期)

企画事業担当 青山圭佑
一、連盟主催の能会は、次の通りでした。

①横浜能楽堂と共催の「第61回横浜能」は、平成25年6月1日に金剛流「熊野」の能と、和泉流狂言「酢薑」により開催しました。入場券は完売、来場者456名、入場率93.8%でした。

②第29回横浜五流能楽大会は平成25年10月12日(土)に「横浜音祭り2013」との連携行事として、当番幹事、観世流梅若会により開催致しました。(別稿「大会報告」参照)
見所には「横浜音祭り2013」関連で100名程の観客が来場し例年の会よりも盛況となりました。

二、平成25年度定期総会は、平成25年4月22日(月)に横浜能楽堂2階レストランにて出席者2

84名(委任状246名、出席者38名)により成立し、行われました。藤本会長を議長として平成24年度の活動報告、会計報告、会計監査報告が行われ、了承されました
また25年度の事業開催準備状況が報告されました。

・理事会は年5回の予定通り行われました。

・「幽玄」の編集会議、番組編成等に関する事務局と当番幹事との打合せ等も適時行われております。

・連盟役員理事は、全員24年度からの留任となりました。

・会員数は25年4月1日現在の463名より18名(個人)の増加となっておりますが退会の方もあり、次回の報告時までに把握致します。

増員の内訳は個人会員で、観世流4、観世流梅若会1、金剛流3、金春流8計18名、特に金春流の山井綱雄師の関係者の入会が目立っております。

第29回

横浜五流能楽大会

観世流梅若会 桑原弥兵衛

平成25年10月12日(土)、第29回横浜五流能楽大会が開催されました。今年は秋になつても暑い日が続き日中は31度の真夏日となり、舞台上へ上る着物仕度

がとても大変だったと思います。

この日の出し物は素謡16番、仕舞8番、連吟5番、独鼓3番、独吟2番の計34番、出演者は延べ349名でした。今回の五流競演の題目は「田村キリ」で各流派で連吟、仕舞、独鼓を熱演されてそれぞれ趣の違ひがありとても良かったです。

大会当日は、「横浜音祭り2013」の期間中なので一般の方々にも横浜五流能楽大会を知ってもらうために、今回は番組を200部多く作成し、それを倉藤理事が市内の地区センター及び文化施設など何ヶ所かに配布してもらいました。そのために関心のある方々から問合せがあり、能楽堂へも足を運んで下さった人が多かったように思います。

大会の準備では相当不安な思いでいきましたが、青山理事（観世流）と水野理事（金春流）及び倉藤理事（金剛流）の人達から親切丁寧なアドバイスを戴き、とても助かりました。今回から番組の印刷所が大洋印刷からダヴィンチ印刷に変わり、何回か足を運びましたが、予定の期日までに出来ましたのでほっとしています。これまで大会の役員の皆様が努力してこられたお蔭で、駐車場、弁当、高見台等の段取りがスムーズに出来たことを深く感謝しております。最後に各流派の代表の方と会員の皆様の協力によって終了できましたこと

を心からお礼を申し上げます。

米寿に至り謡・仕舞

思い出すまに

観世流 豊福久美子

平成18年11月「砦」を舞った時これが観世能楽堂での最後の舞台と思い『人の世の見せ仕舞に砦舞う』でしたが、平成22年にはまた素謡「鸚鵡小町」を謡い『嘴が黄色いまままで老女役』が渋谷能楽堂での最後となりました。

私は80歳の時近所の方に誘われて、つづき謡曲会に入会させて戴きました。お陰様でそれ以来毎月1回、地区センターで長谷川先生始め、紳士淑女の皆さんと楽しくお稽古や、舞台にも出させて戴きました。しかし晩年病気がちで入院を繰り返しますが、謡は私の生きる張りになります。謡は私の生きた証になります。謡は私の生きた証になります。謡は私の生きた証になります。

能は能楽堂で見ることが一番ですが、薪能や観月能もまた格別のものがあります。お勧めは広島厳島神社の観月能です。開催されるのは毎年10月頃です。頃と言うのは満月の満ち潮に合わせて演能されるためです。満ち潮が能楽堂の周りに押し寄せ満月の月の光に舞台は浮かび上がって、逆さ富士ならぬ逆さ能姿が幻想的に映し出され浮

世離れた幽玄の世界が繰り広げられるのです。お囃子の先生方も打ちながら酔いしれ、ノリノリで響きも異なるようです。厳島から広島港までの船で一緒にしますがどの先生方も満面に笑みを浮かべておられました。

興奮を冷ましてくれるのは、帰りの道筋で鹿が缶ジュースの残りを上手に飲んでる姿を見て現実に戻されるのです。また鹿に関しては入場の時、チケットを手にとって並んでいると係りの方から「チケットを鹿から食べられないように注意して下さい」と、毎回二・三の方が食べられてるそうです。

広島厳島神社観月能は、喜多流友枝先生の「融」ほか二度ほど拝見しましたがそれ以来私は観世流ですが喜多流の友枝先生ファンになっています。

春日若宮おん祭

喜多流 茶木原陽子

この「若宮おん祭」の話に心動かされ、去年行ってきました。今回で878回を迎える春日若宮おん祭は、8世紀後半春日大社の草創により、本殿に四柱の神様が祀られ、二百年後第四殿に蛇のお姿で若宮様が顕現された後、12世紀に若宮様の本殿が創建されたが、当時は洪水、飢饉、疫病、富士山の噴火と人々は不安な日々の中にあり、新しい若宮様を慰撫し天下

泰平、万民豊樂を祈るため、お旅所（たびしよ）と呼ばれる行宮を興福寺境内に仮設し、祭礼を行ったのが始まりと言われている。この祭りは12月17日午前零時から午後12時までの一日の祭礼で日本古来の伝統文化に触れるのが素晴らしい。

まず最初に零時から始まる遷幸（せんこう）の儀とは若宮様の社殿からお旅所と呼ばれる仮の行宮へ遷す行事。

ホテルを11時に出る。大社の明



りではなく懐中電灯も所定の所まで。すでに参道には沢山の人、案内の人の足下の明りは小さい。すべて闇の中の行事。友人と立ったところは杉木立に間があり満月に近い月がスポットライトのように参道を照らしている。待つこと40

分社殿の方から吠えるような音声、楽の音が伝わってきた。全くの闇の中、パチパチ燃える音、やがて大松明が参道いっぱい引きずられ、浄め、落ちた火の粉がお旅所へと続く。邪気を払う音声は強くなり、榊を手にした神職に幾重にも囲まれ、道楽の慶雲楽が奏でられる中を遷って行く。これはお神輿の古い姿だ。

あの人垣の中に、宮司に抱かれた若宮様がと思うと、この後の祭例も見たく、私達は列の隙間を前へ前へと足速に歩いた。お旅所の囲いが見えた時、入場制限で何度も止まる。締めかけた時、水に足が取られるように中に入り幸運にも若宮様の神殿の前でピタリ。お旅所では迎乱声（むかえらんじょう）が奏でられ、7メートルもの大太鼓が打ち鳴らされていた。

行宮の中央に瓜灯籠が幽かに揺れる。海川山野の品々が神職の手から手へと運ばれる「素豆之御供」（すこのご）が捧げられ、宮司の祝詞、社伝神楽が奏でられる。歌声、鼓、笛が響き、身動きできなかつた体がゆるむ。五感の緊張そのままにホテルに戻ったのは午前2時。

この日の午後からはお渡り式。影向（ようこう）の松の観覧席にて、12番に編成された芸能集団や祭礼に加わる人達を見る。この松の観覧席の下では薄い布をすっぽりかぶった頭屋児（とうやのこ）が検分し。第四番に入る猿樂は金

春が開口し、弓矢立合三笠風流を演じ、田楽は奈良一刀彫りの人形を飾った花笠を頭に、中門口、刀玉、高足等演ずる等々楽しい行列だった。次はこれらの人々のお旅所祭を是非見たいと思っています。

金剛能楽堂の思い出

金剛流 中西彦次郎

金剛流はシテ方五流の中で唯一京都を本拠とする流儀で華麗な型に特徴があることから「舞金剛」



金剛能楽堂をご存知の方は少ないでしょう。そこで私は昭和40年代の京都で学生として金剛流を学んだものとして旧金剛能楽堂の思い出を書いてみたいと思います。

旧金剛能楽堂は四条室町を北に入った路地の奥にありました。江戸時代末期に建てられたそうで常時公演が行われる能楽堂としては最古と言われていました。全席棧敷席だったので履物は脱いで入りました。演能の日は下足番のおじさんが履物を預かってくれました。

また、見所の奥にお茶を出すおばさんがいましたが、彼女は私の顔を覚えていて、開演時間に遅れて行くと「先生のお能始まっていますよ」と教えてくれたりしました。年季の入った舞台は2階の窓から自然光が入ってきて趣があり、夕方ともなると薄暗くなって「鶴」などは不気味な雰囲気が出たりでした。また舞台が南向きのため、「融」の名所の教えも地名の方角とシテの見る方向が合っていて分かりやすかったです。見所ではゆつたりお茶を飲みながら見ることが当たり前で、間狂言の時はお手洗いやへ行ったり、廊下でおしゃべりをしたりで休憩時間のようにでした。我々学生は見所の一番後ろにあった二階席にいたことが多かったですが、空いていたのと少々行儀の悪い座り方をしている舞台からは見えなかったからです。ただ、かなり老朽化している東京で能楽関係の書店に立ち寄

った時にこの二階席の話が出て「あの崩れ落ちそうだな」と言われて納得するほどでした。

楽屋は宗家の住まいと兼用で夏場には下着姿の先代宗家とすれ違ってドキッとしたりしました。地謡座の後ろに有名な名水である菊水の井戸がありました。いまでも祇園祭のときには跡地の前に菊水鉾が建てられますが、菊水鉾の稚児人形は菊水の話で踏まえて枕慈童（観世流では菊慈童）の格好をしています。

まだまだ書きたいことはありますが紙面が尽きたのでこの辺で終わります。なお、現在の金剛能楽堂は昔の舞台を移築してあり当時をしのぶことが出来ますので、京都に行かれるときは立ち寄られることをお勧めします。演能予定は金剛能楽堂のホームページに掲載されていますのでご参照ください。

私の稽古事情

観世流梅若会 山本晃嗣

去る22年に私の稽古事情について寄稿致しましたが此の度は角当先生に師事する前、佐藤恭司先生の時の事をお話し致します。

昭和48年頃相鉄ジョイナスのカルチャー教室で佐藤先生に御指導を仰ぐ事になりましたが二・三年後自由が丘の佐藤先生の御自宅で習う様になりました。その数年後、月一回の梅若の定式能を拝見している時ふと地謡の先生方の整然と

した格調高い謡を拝聴して、あれはご自分の中にあるものを無本で無心に声に乗せて謡っていらつしやるのであろう、自分もあんな風に謡いたいものだと思っておりました。当時私の住居の近くの方で未だ初心の方でしたが先生のお宅で同じ時刻に一緒に習っておりまして。その方は月に一回謡本を抱えて我が家を訪ね、一緒に謡っておりました。ある年のお正月、1月1日に挨拶方々謡本を持参されて「今年は『鶴亀』位は無本で謡いたいのので初謡に稽古を致しませんか」とのお話でした。常々何時かはと考えていた事なので二つ返事で始めました。お正月なので始める前にまず一献、半分位稽古した所で中休みに一献、終つて又一献と繰返すので酔いが増す一方で成果が上りません。それで日を改めて3日にもう一度やりましょうという事で、3日には何とか謡える様になりました。その数日後佐藤先生の初稽古の日、その方が「私達はお正月に『鶴亀』を無本で謡える様になりました」とお話になりました。先生は「それは感心、早速聞かせて頂きましょう」と云う事で2人並んで『それ青陽の春になれば』と始まったのです。初回の『庭の砂は金銀の』と謡って居る時ふと返しのは何だっただかと一寸考えたのですが出て来ません。とうとうこれで終わりにするかと思ひながら謡い終わると『珠を連ねて敷妙の』と次に自

然に出て来ました。その後はその繰返しで、丁度一夜づけでテストを受けている様で、目は宙に遊び心此の処に有らざる有様で、とても無心に格調高く等どこかへ行ってしまった有様でした。先生は初回の終わりの所で「ハイ結構です」と助け舟を出して頂きましたが、私はこの調子では相当謡い込まないと物にならないぞ、又30冊や50冊位は積上げが必要だと思ひ、敢えなく無本で謡うという考えはお蔵入りに成りました。今は謡本を前に開いて心地良く謡っております。

出張先で出会った謡曲

宝生流 小塚浩志

四国八十八箇所霊場第86番札所は、補陀落山志度寺である。志度寺と言えば、海人（観世流は海土）の舞台である。仕事で志度へ行き、たまたま志度寺がすぐそばにあることを知り、何の準備もないまま、仕事の帰りに志度寺へ向かった。寺の裏門から入ると、海女の墓なる案内があり、それに従い進むと、房前が母のために建立したと伝えられている石塔群があった。説明によると房前は、行基を連れて志度を訪れ、千基の石塔を建立し、法華八講を修して亡き母の菩提を弔ったとある。現在は、海女の墓と言う五輪塔とその両側の経塚及び20基余りの五輪塔が残る。長い間の風雪による傷みが激し

く、また、心無い人のいたずらから守るために、周りが柵で囲まれているのが残念であるが、お墓には花が供えられ、訪れる人の温かさを感じた。私も、「其時海士人申すよう・・・」と、玉の段を奉謡した。海女の命日である7月16日には、「志度寺の十六度市」が開催され、本尊十一面観音の御開帳も行われているとのこと、この本尊が、「南無や志度寺の観音薩埵」であり、今でも、「毎年八講朝暮の勤行」が行われている。寺には、仁王門、金剛力士像、本堂、琺瑯堂、奪衣婆堂、五重塔、無梁庭、曲水式庭園があるが、平成の大修理中とのことで、一部しか拝観することができなかった。

帰り際、琴電の駅で、志度寺からやや離れた所に房前の地名を見つけ、行くことにした。琴電志度線で志度駅から3つ目の房前駅は無人駅である。電車を降り、坂を下って行くと静かな海に出た。今は漁港となっている。海辺を歩きながら、海人の世界を思った。この浜辺で、淡海公は、賤しき海士人と契り、海士人は我が子故に命を捨てるといふ、悲しい物語であるが、この静かな海を見ていると、自らの願望のためには母性愛をも利用するという政治の惨さを、裏に秘めているように感じられた。世阿弥は、母性愛よりも為政者の惨さを表現したかったのかもしれない。

夕方、暗くなった坂道をしばらく

く登ると房前公園に出た。この高台の下が房前の鼻と言われている琴電の景勝地である。ここから海を見ると、真珠島を飲み込み、埋立造成された工業団地の明かりが、向こうに見える。先ほどまで仕事で行っていた所である。ここは、飛鳥、室町、そして現代が同居している場所であり、「海人」が、時間を超えて結んでくれている。

横浜能楽連盟への加入

金春流 高木葉子

平成25年2月、私達のお稽古場関内ホールへ、横浜能楽連盟の3名のお客様が来られました。能楽連盟へのお誘いでした。

以前山井綱雄先生から「横浜能楽連盟は、素人の会で運営され、謡も、舞もすべて自分達で舞台を進めます。五流一緒だから面白いですよ。入られませんか」と言われていましたが、その頃はまだ力不足で「私達だけではとても無理です」と辞退しておりましたところ、わざわざ足をお運び、お勸め下さり、不安ながらも加入させて頂く事になりました。綱雄会東京教室の方々と賛同応援下さり、28名の加入となりました。

古い歴史と伝統を持つこの会への参加は、金春流の中のみを身を置いていた私にとっては、大きな一歩となりました。

仕舞へのスタートは、横浜能楽堂主宰「初めての謡・仕舞教室」

でした。右も左も分からないままに、先生の舞われたお手本の中から曲を選び、お稽古が始まりました。10回目には、能楽堂本舞台で発表会と、先生曰く「何と無謀な企画」に乗り、平成16年4月から8月の真夏日まで、夢中でお稽古をし、発表会が終わる頃には、すっかり仕舞の虜になっておりました。この時、教えて頂いたのが、山井綱雄先生です。

初舞台の感激は、忘れられません。横浜能楽堂には、家が近く地元ということもあり、主人、娘、孫達、趣味仲間のお友達等、応援団の多かったことと、素人批評の面白かったことを覚えています。始めた年齢はすでに60歳を過ぎ、「初めての仕舞教室」出身の若いお仲間を支えられながら10年、衰える記憶力に自分を叱咤激励し、お稽古を重ねております。

山井先生は、エネルギーッシュで、時には、とんでもない計画を立てられます。昨年は、久良岐能舞台での、綱雄会夏期錬成会「百番仕舞会」でした。朝10時から、お昼は1時間弱の休憩のみ、夕方5時半迄、約6時間、代わる代わる皆で百番舞い切りました。謡も先生について目一杯声を出し、終り頃には、のどはヒリヒリ頭はクラクラ、足はヨロヨロ、楽しくハードな経験を致しました。

綱雄会は、若い人が多くお仕舞と両立しながらのお稽古ですが、社中の皆さんは熱心で真面目で、

ほんとうに良く頑張っています。

昨年初めて「第29回横浜五流能楽大会」に参加させて頂き、能楽に対する限らない愛着と誇りを感じ取ることが出来ました。続けることの大切さと、それが出来る幸せを感謝し、70歳を超した私も頑張っていきたいと思っています。

能楽堂だより

二十六年六月・九月の公演案内

二十六年六月・九月の横浜能楽堂の公演予定は、次の通りです。このほか毎月第二日曜日に「横浜能楽堂普及公演―横浜狂言堂―」を開催いたします。

第六十二回横浜能

六月十四日(土) 午後二時開演
狂言「寝音曲」(和泉流)

野村万作
能「頼政」(喜多流) 栗谷能夫

S席四千円、A席三千五百円
B席三千円

チケット発売中

企画公演「暗闇で聴く古典芸能」
六月二十一日(土)

午後六時開演
素謡「西行桜」 近藤乾之助

一管「津島」 松田弘之
語り組踊「手水の緑」 宮城能鳳

素浄瑠璃「卅三間堂棟由来」
豊竹嶋大夫

全席指定五千円
チケット発売中

夏休み親子能楽ワンダーランド
七月二十七日(日) 午後二時開演

狂言「柿山伏」(天蔵流) 山本則重
能「船弁慶」(観世流)

前シテ武田文志
後シテ武田宗典

おとな／S席四千円
A席三千五百円、B席三千円
こども／千五百円

保護者はこどもと同数まで千円引き(ご希望の方は電話か窓口にてお申込み下さい)

*お子様のお席をお求めにならない場合は適用されません。こどもは十八歳以下が対象です。

「体験しよう！」午前十時半から：チケット(こども)ご購入の方対象

能・狂言の動きや能の楽器が体験できます。

定員：八十名(電話か窓口にてお申込下さい) 先着順

*親子でご来場ください。
四月十二日(土) 正午から発売(初日は電話・WEBのみ)

横浜能楽連盟 連絡先

◎文書郵送又はFAXの場合
〒247-0014 横浜市長区公田二九〇一五

FAX 〇四五-一八九-一六三六二
◎電話の場合 横浜能楽堂

TEL 〇四五-一六三-三三〇五〇